大江健三郎
全作品
3

新潮社

大江健三郎全作品 3

一九六六年一二月二五日発行
一九七〇年一〇月三〇日一〇刷

著者大江健三郎
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話東京(03)二六〇局一一一一
振替東京八〇八
大日本印刷、大口製本
定価四八〇円

©1966 Kenzaburo Ōe
乱丁本はお取替えします
〈第四回配本〉

Printed in Japan

大江健三郎全作品3目次

青年の汚名　5　長編小説
上機嫌　163
勇敢な兵士の弟　203
下降生活者　215
幸福な若いギリアク人　239
セヴンティーン　261
不満足　305
スパルタ教育　347
作家は絶対に反政治的たりうるか？　369

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大江健三郎全作品

3

青年の汚名

——荒若アイヌ研究家K氏の未公刊*のノートより、一九五九年転写

《荒若島は宗谷海域の小さな島であるが、かつて鰊の豊富な漁場であったことと、荒若アイヌの本土のアイヌとはことなった個性をもつ伝承とによって知られている。また、近年におよんで高山植物によっても知られている。

われわれが荒若島に旅行するとき、われわれは、きわめてひんぱんに、ある一つの成句を耳にすることになる。その成句、荒若アイヌ語の成句は逐語訳すれば、悪しき青年どもが神の怒りにふれた時代というほどの意味であって、末世を、最悪の時代を指す。

荒若アイヌの神は若者たちを愛して、かれらのために鰊の豊漁をもたらすが、逆に、かれら若者を神が嫌悪し憎むときは、島に鰊はおとずれず、漁による海の幸はさずからない。現在、荒若島は、島の歴史が始って以来の鰊の不漁にみまわれているが、それをさして、島の青年が神に見棄てられ怒りをかっているためだともくする者がいる。かれらは、荒若アイヌの成句をくちぐせにして、不漁を嘆きながら暗に、島の青年を非難する。

荒若島の青年たちは、鰊の不漁がつづくかぎり、この汚名をのがれられない。かれらは島の漁法転換をはかっているが、その見通しは暗いもようである。なお、荒若島に隣接する理胸島にもおなじ成句があるが、** これからこの二つの島の伝承を同傾向のものと類推することは早計にすぎることを警告しておきたい。この二つの島は、八丈島と佐渡島くらいに異なった伝承をもつのである。***》

* 東大言語学教室にその全文がマイクロフィルムにおさめられている筈である。仏訳が試みられている。

** 理胸島の成句には不自然な撥音便がつけくわえられており、荒若島のそれからの類推によってしか意味を判じえない。

*** このノートの転写はN・H・K文芸部近藤氏の好意による。

第一部

〈あの栄光の時代、あの豪華絢爛たる時代、鰊の億をこえる大群が島におしよせてきた時代、鰊の精液が島の周囲を輝やく乳白色に染め、海面が前世紀の怪物の背のように盛りあがってひしめいた時代、逞しい季節労働者たちが疲労のあまりに船底に横たわり、かれらをふるいたたせるための網上げの合唱もむなしく霧のなかに消えてゆき奔入する鰊に網が破られてあらゆる必死の試みが水泡に帰しさえもした時代、本土の貧しい女どもの夢が島へ渡る売春の船に乗りくむ資格を認められることにかかっていた時代、鰊大尽の声名が九州の南端にまでとどろいて季節労働者を奮起させた時代！

あの栄光の時代、あの豪華絢爛たる時代が決定的に過去のものとなり、再び帰ってくることがないと考えること、それが、あの男らしく雄々しい時代に半世紀をこえて生きた人間に可能なことだろうか？　不可能だ。あの時代の再来についての希望を棄てろと懇願し命令する者たち、かれらは七十歳の老人に希望とはなにか希望とはいかなる意味で真摯に固守すべきものであるかを理解し納得する暇がなかったとでも思いこんでいるのか？〉

夜明けだ、鶴屋老人は東の海を、あの栄光の時代に鰊の大群の最先鋒が始めに現われることの通例であった霧こめた東の海を見つめて岬の雪におおわれた岩鼻に立っている。かれの広くがっしりした肩、太い猪首、牛のそれのように衰えを見せない胸、膨んだ腹、長い下肢、それらは岩鼻の一つの英雄的な瘤のように濃霧の流れを割って頑強に立って静かだ。しかし老人の心は道庁の役人に、水産庁から派遣されてきた技師に、そして稚内からかれらを案内してきた旅館の若主人に対してすら、憤怒に燃えくるっている。

役人たち、憎むべき役人たちは昨日の午後の連絡便で島にわたってくると小学校に島の漁民たちを集めて講演した。鰊はもう決して島の周辺にあらわれない、鰊漁で一攫千金をめざす者らはやがて時代の流れにとりのこされ難破し貧困のなかに死をむかえるだろう、鰊とは今や絶望という意味の忌わしい代名詞である。鰊漁への見とおしを棄て、転向しなければならない。

これはめずらしい論旨ではない。六年前、鰊が不意に姿

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

を見せなくなった漁季から、くりかえしまきかえし千万べんとなえられた言葉である。役人たちは熱弁し、かれらの親切さ骨身をおしまぬ奉仕精神を漁民たちに誇示した。それが効を奏しないとみるや脅迫にちかい方法さえもちいて説得を成功させようとした。それもまた六年来、千万べんくりかえされてきたやりかたなのである。結果はどうであったか、それを鶴屋老人は知らない。知る必要も認めない。漁民を集めての役人たちの長口舌、それはむなしい一種の前哨戦のごときものであるからだ。

真の戦いは夕暮に始まる。役人たちと鶴屋老人とのあいだに、表面は儀礼的な微笑と酒杯の応酬をともないながら、心のなかでは怒りと怨念の火花を散らして、真の戦いは鶴屋老人の宏荘な私宅において行なわれる。深夜まで老人は孤軍奮闘して役人たちとわたりあった。かれは一歩も退かなかった。ついに老人の怒声が響きわたり始めたとき、かれの居室はもとより、あの栄光の時代に五十人の季節労働者を起居させた番屋の高い天井、広い土間に、一種の息をこらした沈黙のけはい、数知れぬ姿なき者らの待機のけはいがみなぎったのであった。それはあの栄光の時代に海で死んだ善き若者たちの死霊であり、老人のかつての盟友、老人の兄弟たちの死霊、島の歴史自体の死霊のけはいだったろう。かれらのために老人は戦った。

深夜に、役人たちが酔いと疲労のためにぐったりし、絶望的な敵意に眼をぎらぎらさせて老人の家を問題未解決のまま去ってからも老人は役人たちへの憤怒と嫌悪に一睡もせず朝を待ちのぞんで坐っていたのであった。

鶴屋老人が立っている岩鼻は、天塩アイヌと宗谷アイヌの戦いがおこなわれた古戦場だ。ここで廿五年前に老人はアイヌの頭蓋骨を数個発掘してかれの蒐集にくわえたものだが、それらの頭蓋骨はほとんどすべてが石槍をはじめとして武器による損傷を蒙っていたものであった。天塩アイヌ軍の救援隊として戦いに参加した荒若アイヌは最も勇敢に戦って全滅した。老人はかれのコレクションの頭蓋骨がすべて荒若アイヌのものであるという確信を抱いている。それらの頭蓋骨が前面に傷を負っていることがそれをあかしだてると老人は考えている。

鶴屋老人は自分が今や荒若アイヌの勇将カルアシのように戦っていると感じることがある。老人の血にアイヌの血は流れていない。むしろ老人は、荒若アイヌを絶滅させたがわの、無一文で島にわたり荒若アイヌの土地と漁場とを強奪した者たちの血において生きているというべきだろう。老人は八歳のときに失業した鰊夫の父とともに島へ渡

ってきた。そして父とともに働きかれの漁場をつくりあげた。かれと荒若アイヌ、かれが青年であったころにはまだ一つの勢力であった荒若アイヌとは終生の敵であり、かれとその仲間とは荒若アイヌの青年を私刑にしたことがたびたびある。かれのコレクションの初期のもの、たとえば黒曜石製の石鏃、石槍、石匙、ガラス青玉、浮紋土器、舟形刳紋土器、そして多数の骨器類、それらはかれがなかば脅迫して荒若アイヌの集落から獲得してきたものであり、かれは荒若アイヌの人妻を長い期間にわたって奴隷にもおぼしい情婦としていたことがある。かれは深夜に荒若アイヌの伝承的な武器をもった一団におそわれて重傷をうけたし、荒若アイヌの娘に性病をうつされたこともあったが、決算してみればかれは七十年の生涯にわたって荒若アイヌへの略奪者であり暴君であった。今や絶滅した荒若アイヌも、かれが居なければあるいはかれにいくばくかの憐憫の情があれば、その終焉を数年は後にのばしえたかもしれない。

しかし鶴屋老人は、今や荒若アイヌたちを、その喪われた弱小民族の最も弱小な部族を、深い哀惜の念において回想するのである。本土から島におとずれる者たちの誰にたいしてよりも老人は荒若アイヌに親近を感じている。すでに鶴屋老人の躰を流れる血は本土の人間のそれによりも、死霊と化した荒若アイヌの血に近いのだ。老人はその血のために戦っているというべきかもしれない。少なくとも天塩アイヌと宗谷アイヌの戦闘以来、この島とその周辺の海で荒あらしい死をとげた者たちの死霊のために、やがて老人がそこに加わるべき死霊の戦列のために老人は力をつくしているというべきだろう。

戦いは、あの栄光の時代の不意の終結以来つづいている。

六年前だ、鰊の魚群は島の周辺に姿をあらわさず、番屋で待機した季節労働者は怠惰な日々をすごしたあと本土へ帰って行き、定地に敷設した鰊網はむなしく海草や雑魚をのみこんで破損した。しかしその年の漁季の終りに島の漁民たちがむかえた憂鬱な春には、まだ鰊漁を見放すものたちはいなかった。漁民たちはその一年を不運の一年として忘れさる筈であった。しかし栄光の時代の決定的な消滅の印象は、それにつづく数年の不漁があきらかにしていった。漁民たちへの道庁や中央の官庁からの働きかけは、かれらを大幅な転向へ近づけた。

島の漁場は、かつて島のすべての漁民によって分けもたれた定地によって秩序をたもっていたのであった。栄光の

時代に島の漁民たちはおたがいには従属関係をもたず、鰊の漁季には、おのおのの漁民が、その定地の規模や経済力にしたがって、本土へ季節労働者を傭いいれに出かけた。したがって栄光の時代が過去のものになったことを役人たちが宣伝したとき、定地の個人経営者としての誇りにみちた漁民たちに恐怖がおしよせて、かれらを集結させ、この絶望的な布告のまえで頭を集めさせた。二年目の完全な不漁がかれらのほとんどすべてにその定地を放棄させ鰊漁への希望を棄てさせるにいたると、かれらは共同出資して遠海漁業に転向する動きをおこし道庁がそれを援助した。

鶴屋老人の闘争がたちまち尖鋭化し、かれが道庁を敵として暗躍を始めたのがその時期においてであった。老人は、茫然自失して遠海漁業へ盲めっぽうの腕をのばした旧同志を急襲し、かれらの動きをうばった。老人はその年の夏までに島の漁民たちのすべてをかれの資本力のもとに従属させ、漁民たちを個人経営者の位置から、老人の保護のもとにある雇傭者へと変じしめたのであった。二年間の不漁が漁民たちを倒産寸前に追いこんでおり、遠洋漁業への転換が厖大な資本力を必要として、そこに漁民たちの頭うち状態をひきおこしていたこと、それが道庁の妨害にもかかわらず老人に勝利をもたらしたのであった。漁民たちは老人の漁船の乗組員として生活費を支給され、負債を肩がわりされたわけだが、老人の架空の遠洋漁業船は決して出航することがなかった。

――あなたは島の漁民を飼い殺しにしようとしている、あなたは漁民の不安と経済的な行きづまりに乗じてかれらをあなたの経済力でがんじがらめにした。あなたにたいして経済的な負債支払をおこなわなければ、島の漁民たちは自由な漁業をおこなえないわけだが、あなたがかれらに遠洋漁域への出漁を許可しないために、漁民たちは終生、あなたに負債を支払う能力は回復しえない。あなたは島の漁民たちの貧困の根元をおさえこんでいるのです。

道庁の役人が老人にむかってくりかえしてきた攻撃の言葉の一つはこれだ。昨夜もまた役人は老人に執拗にくいさがってこの攻撃の言葉をくりかえしたのであった。

――島の漁民が生きてゆかれない明日をひかえているとすれば、鶴屋老人、それはあなたの責任です。島の漁民の疫病神があなたということになる。あなたは、自分一個の妄想、鰊が再びやってくるというお先真暗な妄想にすがりついて自分一個をほろぼそうとしているのじゃない。あなたがもし自分だけで自分の妄想の犠牲になる決心ならばそれはあなたの自由でしょう。民主主義の政体だ。個人には

みずからほろびる自由がある。しかしそれに他人を巻きそえにすることは許されない。あなたは島の漁民に、餓死する明日を準備しているわけだ。

老人は道庁の役人の蒼ざめて消耗した顔、眼鏡の奥で二匹の鼠のように怖気をふるって、しかし憎悪に燃えている眼を見かえす。この顔、本土で官庁につとめている穀つぶしの顔とくらべて、島の漁民たちの顔がいかに威厳と人間らしさをもっているかという考えが老人に勇気をあたえる。島の漁民の顔こそが真の人間の風貌であり、島の漁民の顔こそ栄光の時代の自恃や誇り、いくたびもの難船や島を頻繁におそった土砂崩れ、季節労働者の叛乱、それら危険な戦いを生き残ってきた者の決定的な逞しさが輝いて荒若アイヌを駆逐した強い日本人の風貌が達成されている。それは誇りをもって日本人の顔と主張することのできる顔だ。それらの顔はたがいに似かよい同じ血を感じさせる。それらの顔は英雄的な家族、血と死をおそれない者の血統の大同団結を思わせる。しかもそれらの顔の持主たちは、日本のほとんど全土から流れてきた他国者であり、おたがいの血は日本人として可能なかぎり互いに遠いのだ。沖縄や朝鮮からやってきた者もいる。しかしかれらは同じ声、同じ顔、同じ精神をもっているのである。荒若島の生活、それがかれらの多種多様の血を一つ血統にまとめる。老人はその血統の危機に立ちあがってその血統の護持のために闘争を開始したのだ。

――わしは島の人間を餓えさせない、明日もわしが生きている以上、島の人間は誰一人餓死することはないだろう。

鶴屋老人は七十年のあいだ海上で叫ぶためにつかってきた声を眼鏡とうすい唇の官吏にむかってもちいることにあるとまどいを感じないではいられない。老人はむやみに咳ばらいし吃り、かれの声はとぎれとぎれになり、言葉の間隙には唸り声までまじえてしまう。しかし老人は黙ってひきさがる意志は毛頭持たない。

――確かにそうかもしれません、と道庁の役人は一歩後退するがそれも反撃の態勢をととのえるための一歩なのだ。しかしあなたが死んでしまったあと島の人間はどうするか、現在、島の漁民の生活があなたから支給される金でまかなわれていることはわかっています。それは確かにあなたが破産しない限り、あなたが生きている限り続くでしょう。しかしあなたの死後、かれらは無一文でこの島の貧しい土地に徒手空拳で立っていることを発見する。それでおしまいだ。そのときになってかれらが新しい漁法への再出発を考えてもすでに遅いのです。あなたの金によって暮

すかれらはしだいに怠惰になってゆく。そしてかれらが怠惰な性癖をどうにかする考えになったとしても、そのときには荒若島からの船が漁場とすべき場所は本土の漁民たち、稚内周辺の漁民たちに占有されてしまっていることでしょう。樺太からひきあげてきた漁民のなかには、すでにその方法で成功をおさめた者たちがいる。かれらの十年前の暮しの悲惨さは眼をおおうばかりだった。しかし今やかれらは生活をたてなおし進出している。かれらの進出を食いとめるために最後の機会があるとすればそれが今なんです。今のうちに島の人間も新しい漁場へ自分たちの船を漕ぎ出さなければならない。その最後の希望をおしつぶしているのがあなたです。

鶴屋老人は憤怒にもえて道庁の役人を睨みすえていた。老人はその青ざめた貧相な男の甲高い声によって、かれ自身の死が言及されたことに怒りをおさえることができない。かれがその狼藉者を打ちすえなかったのは、その男があまりにも貧弱な躰と卑怯な眼とをもって一匹の鼠のように存在しているにすぎなかったからだ。死という言葉は不意の嵐をかれの内部にまきおこした。

《おれが死んだあと荒若島はなお存在しつづけるのか？おれは死とともに津波をひきおこしてこの島を沈めてしまう荒ぶる神々の一人ではないのか？　おれの死のあと、はるかな深海から鰊の魚群は精液の匂いのするミルク色の津波となっておしよせ、おれの声おれの容貌をも知らぬ若者たちが網上げの歌をうたいながらそれをすなどるのか？おれが死んだあと、この空虚な島に、鰊は決しておとずれないまま永い年月がすぎさるのか？　おれは死ぬのか？鰊が島にたえてあらわれなくなったこと、それはおれの死をあらかじめ告げしらせるための信号ではないか？　そうだとすればおれの闘いはなんとむなしいことだろう》

鶴屋老人はかれのまえに暗く深くひらいた深淵に眼もくらむ思いで死についての感想を追いちらすべくこころみたのであった。荒若島の死、それは鰊の急激な消失によって暗示され、鶴屋老人が怒りと恐怖とのなかで鰊漁にすがりついているのは、むしろ鰊にたいしてではなく、かれ自身の死をもふくむ荒若島の死にたいしてあらがっているのではないか？　《これは夜に考えるべき思想ではない。ましてや敵とむかいあって論争しているときに考える問題ではない。これはやがて検討すべき思想だが、今それをおこなうべきではない》

鶴屋老人はそこで猛然と眼前の敵、死よりは比較を絶してくみしやすい敵におそいかかっていったのだ。

――この島の漁師は怠惰になることはない。怠惰な男や卑怯な男が漁師としてこの島で生きてゆくことは可能でない。わしがあたえている金は怠惰な漁師を育てるためのものでない。わしは漁師どもに待機させているのだ。待機することは躰をなまくらにすることじゃない。げんにかれらは躰をきたえている。海草とりや鱈船に乗って充分に働いているのだ。わしは鰊の漁季以外に島の漁師を束縛しているおぼえはない。今ですら漁師どもは躰を酷使しているほどなのだ。

――稚内周辺の樺太漁民との対抗上、早く漁法を転換しろという意見にもわしは反対だ。あいつらの汚いやりかたを島の漁民がまねることはできない。しかもあいつらは汚ない漁法をやらなければならないさしせまった事情から出発したのだ。そこであいつらの汚ない漁法はその限りでは正当化されるだろう。しかし島の人間はちがう。島の人間はどん底にいるわけではない。島の人間が汚ない漁法を始めるとすれば、それは幾つかの方法のうちから最も汚ない方法をすすんで選びとったことになる。荒若島の者がすすんで汚ない方法に身をけがすことは逆に樺太からの引揚漁民をますます汚ないどん底に追いこむだろう。そしてこの勝負がどうきまろうと非難されるのは荒若島の者だ。げんにこのわしが非難する。しかも、わしは調査したあとでこう判定したのだが宗谷近辺の漁村で輝かしい明日を予定する漁法がおこなわれているところはないのだ。稚内近辺の旧樺太漁民のなかに小数の成功者があってその男が議員になったというようなことはある。しかしその男の汚ない足の下に踏みつけられた無数の引揚者がいる。平均すればかれらの収入は荒若島の最悪の状況よりもなお悪い。そこへまた荒若島の人間がわりこむとなるとどうなるか？　明日が輝かしいかどうか、あんたはそれを輝かしいと欺瞞にみちて吹聴する。しかしこの島に鰊の漁獲が再び始まらない以上、輝かしい明日はないのだ。それを道庁の役人のあんたが知らない訳はない。わしはそこであんたのやりかたを欺瞞だというのだ。

水産庁の役人は黄色い歯茎をむきだして抗弁する。かれの二本の前歯は他の歯にくらべて不均衡に大きく長い。しかもその根元は歯槽膿漏めいたただれをおこした歯茎から今にも脱けおちそうに露わになっている、それが臭う。

――あなたの御意見はですね、とその臭い口腔の男が鶴屋老人にむかって躰をのりだしてささやくようにいうのだ。たしかに正確なところをついています。しかし、だから鰊を待つというのはまちがっていますよ。そのような結

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com